

シンナーを吸うマニラのストリートチルドレン

先日マニラタイムスの日曜版にストリートチルドレンがシンナーを吸っている記事が掲載されていました。記事の内容は以下の通りです。

フィリピンは人口約9000万人のうち670万が覚せい剤またはMDMAを乱用していると政府の調査で報告されています。2008年国連麻薬レポートによると、世界で一番覚せい剤が流行しているのはフィリピンです。

また、フィリピンに150万人いるストリートチルドレンの約半分はシンナーを乱用し、特にラグビーと呼ばれる住宅用の接着剤を吸引しているとのこと。

アジアの5つのカトリック系大学の研究者が、薬物乱用の実態について20人(7歳～17歳)の子供たちの調査を行った結果、子供たちの日々の関心事は生活の糧を得ることで、それはストリートの中でありました。まずお金を恵んでもらい、次に食べ物を恵んでもらい、そしてお金の無い場合は残飯を恵んでもらいます。一日に一回食事が出来ればいい方で、ゴミの中に入っている食べ物や水を飲み、お腹を壊して入院した子供もいます。また、彼らの家庭は子供を育てる環境として十分ではなく、自ら逃げ出してくることもあり、元々片親であったり、家族と暮らしている場合でも失業に近い状態であったりというケースも多いようです。

日々の生活の中で、シンナーを吸うことは、食べたり寝たりすることと同じくらい日常のことで、それはストリートの中で暮らしていくにはなくてはならないものになっています。

しかし、彼らも未来の生活には憧れを抱いていて、学校に戻りたい、家族を支えていきたい、ファーストフードの店員、警察官、消防士、バスの運転手となって働きたいと思っている人もいます。

その一方で、未来に何の希望も持てない子もいます。それは今、絶望の中にいるからです。

アパリでは、フィリピンの薬物依存症者を支援するため、JICA草の根技術協力事業の準備を進めています。詳しくは次ページをご覧ください。



2009年2月8日マニラタイムスの日曜版

今春より国際協力活動がスタートします！

長い間準備を進めてまいりました、フィリピン・マニラにおけるJICA（国際協力機構）とのプロジェクトが今春より開始されます。このプロジェクトの大きな目的は、マニラの貧困層の地域で薬物を使用している人たちのために回復のミーティング（アパリミーティング）を開きたいと考え、そのミーティングを開く環境を整えること、そしてそのミーティングを継続させていくための人材（コアメンバー）を育成することです。

3年間で日本からマニラへの渡航6回と、マニラのコアメンバーを日本に招聘しての研修を2回、企画しています。主に現地で活動する日本人スタッフはダルクで回復した人たちです。日本のダルクで回復した人が、現地の薬物依存症者に何かメッセージを届けられればと思っています。マニラのコアメンバーも薬物依存症からの回復者で12ステップのプログラムを理解している人を考えています。

提案事業の概要	
対象国名	フィリピン
事業名	マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業
事業の背景と必要性	<p>フィリピンには約200万人の薬物乱用者がいると言われる。その多くは覚せい剤乱用者である。覚せい剤はフィリピンでは“shabu”と呼ばれているが、日本の覚せい剤の隠語である「シャブ」に由来するものである。覚せい剤は、1gあたり約1500ペソであり、100ペソ程度の小さな包装単位でも入手が可能のため、貧困層においても使用が拡大する原因の一つとなっている。日本から持ち込まれた覚せい剤の問題に苦しむ薬物依存症者の回復支援をすることは、薬物乱用の歴史的背景からも妥当性の高いことである。</p> <p>マニラでは回復プログラムにつながる薬物依存症者は富裕層のみであり、貧困層にまでいき渡っていない。日本での回復プログラムの核であるミーティングをマニラの貧困層で開くことにより、誰にでも回復のチャンスがあるということを広く認知してもらおう。アパリミーティングが地域で開催されることで貧困層の中でも薬物依存からの回復が可能となる。</p>
事業の目的	マニラの貧困層に薬物依存症者のためのアパリミーティングが開催される環境が整う
対象地域	フィリピン マニラ市
受益者層	依存症者本人とその家族、その他のワークショップ参加者(リハビリ施設職員、精神病院職員等) 約200名
活動及び期待される成果	<ol style="list-style-type: none"> 1、本事業を実施する上で必要な現地情報を収集し、中心となるコアメンバー5名を選出する。 2、コアメンバーの本邦研修により、アパリミーティング開催に必要なノウハウやファシリテートスキルを学ぶ。 3、現地ワークショップ(模擬ミーティング)を開催し、地域で薬物依存症についての理解とアパリミーティングに対する理解を深める。 4、ミーティングの際に使用するアパリミーティング・ハンドブックを作成する。
実施期間	2009年5月～2012年3月(3年)

JICA（国際協力機構）のPCM研修に参加して

1/31～2/1と2/7～8の2回に分けて計3名がJICAで行われたPCM(プロジェクト・サイクル・マネジメント)研修に参加してきました。今回は特にJICA草の根技術協力事業で提案中の「マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業」をより質の高いプロジェクトにする為にも必須と考え、強く必要性を感じての参加となりました。

PCM手法は、開発プロジェクトの計画立案・実施・モニタリング・評価のために、JICAをはじめ多くの開発援助機構で用いられている手法です。PCM手法はプロジェクトの計画づくりを参加型でどのように行うかという「計画手法」と実施中のプロジェクトをどのようにモニタリングし、評価するかという「モニタリング評価手法」の2つが主な手法となっています。

今回の研修は研修者が2つのグループに分かれてモデルケースとなる架空途上国の事例をふまえて、援助を必要とする人々の抱えている問題や課題を考えながら行うものでした。内容的には、PCM手法を用いて、関係者分析、問題分析、目的分析、プロジェクトの選択、PDM(プロジェクト・デザイン・マトリックス)作成などをモデレーターとともに研修者が進めていく「計画手法」を用いた実践的なものが主でした。

研修を行うにあたっては、モデルケースに登場する架空の国際協力団体になりきって進めていくわけですが、それはそこに登場する架空の団体の「得意」とするものであって、自分自身の「得意」とするものではないのですが、自分の行っていることの思い入れなどが強く出てしまうあまり、本来の「研修のためのデモンストレーション」という焦点がずれてしまう場面もありました。しかし、そこは講師であるモデレーターが軌道修正しながら、無事研修は終了しました。

研修参加者は両日とも約20名で、すでに国際協力事業に携わっている方たちが多く、様々な情報交換などのコミュニケーションがとれたことも、今後私たちが国際協力事業を行っていくにあたり大変参考になりました。

今回この研修を通して、手法の方法論だけでなく、途上国の現状理解、開発援助の課題、難しさを理解することができました。また、PCM手法の特徴である参加型、一貫性、論理性は、人々が協力しあって共に考え、作り上げる行動の基本として、さまざまな活動に広く応用、活用できるのではないかと感じました。



PCM研修のようす
JICA地球ひろばにて